

多田院御家人ゆかりの屋敷構え — 摂丹型民家分布圏の農家に見る武家由来の家構え —

ひとはく地域研究員 山崎敏昭

1 はじめに 多田院御家人とは(概要・歴史)

摂津国川辺郡多田荘で源(多田)満仲が形成した武士団に対し、鎌倉幕府から、清和源氏の発祥の地・祖廟所として将軍家が崇敬していた多田院の守護を任じられた。その一族郎党は、「多田院御家人」と呼ばれた。戦国時代末期に政権により多田院御家人それぞれの所領は没収されたが、近世以降は江戸幕府により多田院が再興され、多田院御家人も公認された。再興後の多田院御家人は無禄で多田院を守護する任に当たり、幕末には新政府の求めに応じ禁裏御守衛士多田隊を組織し、戊辰戦争に参戦し東北や北越に転戦し活躍した。

多田院御家人は、多田院の所在する川西市を中心に、猪名川町・三田市・宝塚市(旧川辺郡域)、大阪府豊能郡豊能町・能勢町(旧能勢郡域)、京都府亀岡市(旧桑田郡域)等に広がりが認められ、それぞれの地域で末裔の人々が伝統を現代に継承している。

このような多田院御家人については、猪名川町歴史文化遺産活性化実行委員会が主体となり、平成26～30年(2014～18)にかけて調査プロジェクトが生まれ、文化財所在調査や古文書資料の目録作成が行われ、2件の御家人住宅の概要が報告された。

2 研究の方法

筆者は、丹波の中小盆地を中心とする京都府・大阪府北部・兵庫県南西部(旧摂津・丹波・山城国)に分布する、格式性を重視した近世民家「摂丹型民家」の家格表現・格式性を調べるなかで、旧摂津国川辺郡や能勢郡域の農村社会で、地域のリーダーとして位置づけられる「多田院御家人」の人々の住まいに出会った。

本研究では、多田院御家人の人々の住まいについて、『猪名川町史』をはじめとする調査成果を参照しつつ、フィールド調査を実施することにより、その格式表現を摂丹型民家の分布圏における家格表象方法の中に位置づけるものである。



N家住宅(左)、

参考:この地域の上層農家を模して造られた近代住宅「静思館」(中)、同式台玄関(右) ※参考の「静思館」の俯瞰写真(中)では、右側の長屋門から中庭を経て主屋に至る配置がよくわかる。

なお、多田院御家人の人々の住まいについては、現在も末裔の方が継承し居住しておられる。このことに配慮して、英字略号にて表記させていただいた。

3 旧川辺郡猪名川町域における多田院御家人の住まい

猪名川町域は、兵庫県東南部の阪神北地区の東北に位置しており、東部は大阪府豊能郡能勢町、西部は三田市・宝塚市、南部は川西市、北部は丹波篠山市に接している。

猪名川町域には、近世には16家を数える多田院御家人が認められ、その末裔の人々が伝統を継承している事が、これまでの調査プロジェクトの中で明らかになっている。

猪名川町域で確認した多田院御家人の住まいの特徴は以下のとおりである。

- 1) 主屋（母家）は、妻入り型式の撰丹型民家である場合もあるが、平入りの形式の場合が多い。近世（江戸時代）には撰丹型民家であったものが、平入り型式に建て替わった事が想定される。ただし、歴史プロジェクトで調査されたT家住宅では、明治時代に隠居所として主屋を建て直した際に、平入り型式であった主屋を妻入り型式に変更したことが明らかになっている。
- 2) 主屋（母家）が撰丹型民家である場合は、入母屋屋根の正面に位置に破風を揚げる例が見られる。また、座敷を拡張して突き出す「角屋」形式を事例も認められる。
- 3) 主屋の入口に式台玄関を設ける。普段の出入り口の隣に、武家の格式を示す式台・玄関が設けられる。式台は式台、上り框（かまち）、取次が揃い、突留の舞良戸を設える本格的なもので、屋内には、取次の間（2～4.5畳）が設けられる事が多い。
- 4) 屋敷構えは、門が設けられる。門の形式は、江戸時代以来の長屋門を継承する住まいが多く、少数であるが薬医門形式の住まいも認められた。

以上の猪名川町域の多田院御家人の住まいの特徴に見た、門・式台玄関等の設えは、撰丹型民家の分布圏における口丹波地域（旧桑田郡域）の農村社会の上層に位置した苗中の人々の住まいにも認められた。撰丹型民家の分布圏に共通した近世における農村社会の上層者に共通した特徴であったことがうかがえる。

猪名川町域の多田院御家人の住まいは、当地域の農村社会の歴史的な成り立ちを表わすだけでなく、特色ある地域景観を構成する重要な地域文化遺産である。

文末になりましたが、御協力いただきました各家の皆さんに深く感謝申し上げます。

【参考文献】

猪名川町歴史文化遺産活性化実行委員会：川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究—その4総集編—，多田院御家人と多田荘の歴史を紐解く，多田院御家人関係資料調査プロジェクト報告書，2018.03